

先月までの為替相場のレビューと、今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2015/08/03

## 市場の関心はギリシャから米国へ

通貨ペア	基調		ページ数
<a href="#">ユーロ/円</a>	➡	<b>方向感模索も乱高下に注意</b> 予想レンジ: 133.000~140.000円	2-3
<a href="#">ユーロ/ドル</a>	↘	<b>ギリシャ不安はひとまず後退</b> 予想レンジ: 1.07000~1.11500ドル	4-5
<a href="#">ポンド/円</a>	➡	<b>「スーパー・サズデイ」に注目</b> 予想レンジ: 189.500~197.500円	6-7
<a href="#">ポンド/ドル</a>	➡	<b>複雑な値動きに</b> 予想レンジ: 1.51500 ~ 1.59750 ドル	8-9

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2015 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

## ユーロ/円 7月の推移

EUR/JPY

7月のユーロ/円相場は133.307～137.795円のレンジで推移。月間の終値ベースではほぼ横ばいとなった。

月前半はギリシャのユーロ離脱が懸念されて軟調に推移する場面が見られたが、ギリシャがユーロ圏の提案を受け入れた事でリスク回避の動きが後退して反発。その後は上海株の動向に一喜一憂する場面が見られたが、市場の中心テーマが米利上げ開始時期となった事もあり、ユーロ/円はユーロ/ドルとドル/円に挟まれて方向感を喪失。概ね134～137円台でもみ合う展開が続いた。



## 四本値

OPEN	136.382
HIGH	137.795
LOW	133.307
CLOSE	136.140

6日	ギリシャで5日に行われた、緊縮策受け入れの是非を問う国民投票で「ノー(反対)」が多数を占めた事を受け、ギリシャ情勢の先行き懸念が広がり、リスク回避の動きが加速。ユーロ/円は窓を開けて始まると、133.886円まで急落。ただ、その後は「(交渉の障害と見られていた)ギリシャのバルファキス財務相が辞任」との報道を受け、ギリシャと国際債権団との協議が進展するとの期待から136.063円まで反発した。
9日	「中国警察当局が悪質な空売りを調査」などの報道を受けて上海株が大きく反発する中、ユーロ/円は135.065円まで上昇。しかし、ショイブレ独財務相が「ギリシャの債務をヘアカットしない限り持続不可能」「しかし、欧州連合(EU)の規律に違反するため、ヘアカットは出来ない」などと述べた事が伝わり、ギリシャ協議の難しさが意識される中で133.307円まで反落した。
10日	ギリシャ政府がユーロ圏に対して日本時間10日未明に提出した新提案が年金制度や付加価値税などに踏み込んだ内容で、欧州委員会が6月26日に提案した案と酷似していると報じられると、ユーロ/円は上昇してスタート。ユーログループのダイセルブルーム議長が「11日のユーロ圏財務相会合で大きな決断を下す可能性」、EU当局者が「11日のユーロ圏財務相会合でギリシャ支援交渉が合意すればユーロ圏首脳会議は必要ない」とそれぞれ述べる中でギリシャ支援協議についての楽観的な見方が広がり、137.283円まで一段高となった。
13日	12日から続いたユーロ圏首脳会議がギリシャ支援について「合意」と報じられるとユーロ/円は137.795円まで上昇。しかし、これを受けて米長期金利が上昇した一方、独長期金利が低下した事でドル買い・ユーロ売りが活発化してユーロ/ドルが下落すると、ユーロ/円は急反落した。
24日	仏7月PMI製造業・速報が49.6、独7月PMI製造業・速報が51.5、ユーロ圏7月PMI製造業・速報が52.2と軒並み市場予想(50.8、51.9、52.5)を下回り、ユーロ/円は135.530円まで下落した。
31日	ユーロ圏7月消費者物価・速報は前年比+0.2%と事前予想通りであったが、コア指数が同+1.0%と予想(+0.8%)を上回り、昨年4月以来の高い伸びを示した事を受け、ユーロ/円は上昇。予想より弱い米4-6月期雇用コスト指数を受けてユーロ/ドルが1.11ドル台を回復すると、137.348円まで一段高となった。ただ、その後はユーロ/ドルが失速したため上げ幅を縮小した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

## EUR/JPY

## 日経平均

OPEN	20291.05
HIGH	20850.00
LOW	19115.20
CLOSE	20585.24

## 独 D A X

OPEN	11050.32
HIGH	11802.37
LOW	10652.79
CLOSE	11308.99

## 独2年債利回

OPEN	-0.227%
HIGH	-0.197%
LOW	-0.282%
CLOSE	-0.232%

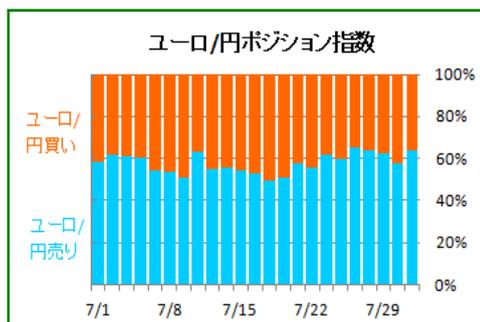
## 独10年債利回

OPEN	0.774%
HIGH	0.986%
LOW	0.607%
CLOSE	0.644%

## 7月のポジション動向

## 8月の注目ポイント

## 月間指標カレンダー(外部リンク)



- ・6月ユーロ圏小売売上高(5日)
- ・7月日本通関ベース貿易収支
- ・日銀金融政策決定会合(6-7日)
- ・8月中国財新製造業PMI・速報(24日)
- ・7月中国貿易収支(8日)
- ・8月独ZEW景況感調査(11日)
- ・8月独/ユーロ圏PMI製造業・速報(24日)
- ・8月独ZEW景況感調査(11日)
- ・8月独IFO景況指数(25日)
- ・6月ユーロ圏鉱工業生産(12日)
- ・7月日本全国消費者物価指数(28日)
- ・4-6月期日本GDP・一次速報(17日)
- ・8月ユーロ圏消費者物価指数・速報(31日)

## 8月の見通し

ギリシャのEU離脱懸念がひとまず後退してユーロ売り圧力が和らぐ一方、6月の黒田日銀総裁の発言により本邦の追加金融緩和観測が後退していることから、円売りも盛り上がりには欠けている。市場の中心テーマが米利上げ開始時期に集まっていることもあり、今月のユーロ/円は方向感を欠く展開が見込まれる。ユーロ圏については、ユーロ圏8月消費者物価指数・速報値(31日)を始めとしたインフレ指標や景気動向に関する指標に注目である。本邦については8日の黒田日銀総裁の会見での今後の金融政策についての見解や、4-6月期GDP・一次速報(17日)などに関心が集まりそうだ。

2002年4月以降のユーロ/円相場の月間騰落を見ると、8月は平均6.806円と平均(6.893円)にかなり近い。このことから、夏枯れ相場という表現は当てはまりにくいと言える。先月以降は概ね週足の一目均衡表の基準線(7月31日終了時点では133.572円)と転換線(同、137.179円)でもみ合う展開が続いている。市場参加者が減少する中、このレンジをブレイクすると不意の乱高下につながる事もあり得るので注意したい。(川畑)

(予想レンジ: 133.000~140.000円)

## ユーロ/ドル 7月の推移

EUR/USD

7月のユーロ/ドル相場は1.08083～1.12168ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.4%の下落(ユーロ安・ドル高)となった。

上旬はギリシャでの国民投票実施など同国のユーロ離脱が現実味を帯びたが、その後はギリシャがユーロ圏首脳会議の内容を受け入れたため、リスク回避の動きはひとまず後退し上昇。その後は、米国で連邦準備制度理事会(FRB)のイエレン議長議会証言や連邦公開市場委員会(FOMC)があり、結果的に9月利上げ観測が維持された事から伸び悩んだ。月を通して経済イベントには事欠かなかったがいずれも決定打にはならなかったため、1ヵ月間の値幅は400ポイント程と今年2月(358.8ポイント)に次ぐ小動きとなった。



## 四本値

OPEN	1.11348
HIGH	1.12168
LOW	1.08083
CLOSE	1.09829

6日	ギリシャで5日に行われた、緊縮策受け入れの是非を問う国民投票で「ノー(反対)」が多数を占めた事を受け、ギリシャ情勢の先行き懸念が広がり、リスク回避の動きが加速すると、ユーロ/ドルは1.09775ドルまで急落。ただ、その後は「(交渉の障害と見られていた)ギリシャのバルファキス財務相が辞任」との報道を受け、ギリシャと国際債権団との協議が進展するとの期待から1.10953ドルまで反発した。
10日	ギリシャ政府がユーロ圏に対して日本時間10日未明に提出した新提案が年金制度や付加価値税などに踏み込んだ内容で、欧州委員会が6月26日に提案した案と酷似していると報じられると、ユーロ/ドルは上昇してスタート。ユーログループのダイセルブルーム議長が「11日のユーロ圏財務相会合で大きな決断を下す可能性」、欧州連合(EU)当局者が「11日のユーロ圏財務相会合でギリシャ支援交渉が合意すればユーロ圏首脳会議は必要ない」とそれぞれ述べる中でギリシャ支援協議についての楽観的な見方が広がり、1.12618ドルまで一段高となった。
13日	12日から続いたユーロ圏首脳会議で、「3年間で最大860億ユーロの金融支援」を柱とする第3次ギリシャ支援プログラムについて「合意」と報じられるとユーロ/ドルは1.11967ドルまで上昇。しかし、これを受けて米長期金利が上昇した一方、独長期金利が低下した事でドル買い・ユーロ売りが活発化すると、1.09944ドルまで急反落した。
15日	米7月ニューヨーク連銀製造業景気指数が+3.86、米6月鉱工業生産は前月比+0.3%といずれも予想(+3.25、+0.2%)を上回った事や、FRBのイエレン議長の議会証言原稿が「年内いずれかの時点で利上げが適切」「雇用と経済の改善に向けて見通しは良好」などと利上げに対して前向きだった事などからドル買いが強まり、ユーロ/ドルは大きく値を下げた。
29日	FOMCは声明を発表し、経済や雇用情勢の判断を引き上げた事で9月利上げの可能性に含みを残す内容であった。これを受けてドル買いが強まり、ユーロ/ドルは1.09661ドルまで下落した。
31日	ユーロ圏7月消費者物価・速報は前年比+0.2%と事前予想通りであったが、コア指数が同+1.0%と予想(+0.8%)を上回り、昨年4月以来の高い伸びを示した事を受け、ユーロ/ドルが上昇。米4-6月期雇用コスト指数が前期比+0.2%(予想:+0.6%)と1982年の統計開始以来最低の伸びを記録したを受けてドル売りが強まると、1.11148ドルまで一段高となった。ただ、その後は全般的にドル買いが強まった事もあり、1.0960ドル台まで押し戻された。

## EUR/USD

## NYダウ平均

OPEN	17638.12
HIGH	18137.12
LOW	17399.17
CLOSE	17689.86

## 独10年債利回

OPEN	0.774%
HIGH	0.986%
LOW	0.607%
CLOSE	0.644%

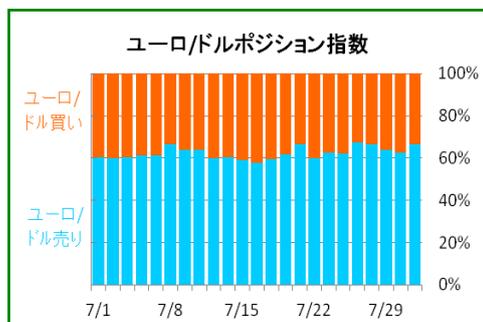
## 米10年債利回

OPEN	2.3315%
HIGH	2.4666%
LOW	2.1744%
CLOSE	2.1801%

## 7月のポジション動向

## 8月の注目ポイント

## 月間指標カレンダー(外部リンク)



- ・6月ユーロ圏小売売上高(5日)
- ・8月中国財新製造業PMI・速報(24日)
- ・日銀金融政策決定会合(6-7日)
- ・8月独/ユーロ圏PMI製造業・速報(24日)
- ・7月中国貿易収支(8日)
- ・8月独IFO景況指数(25日)
- ・8月独ZEW景況感調査(11日)
- ・8月ユーロ圏消費者物価指数・速報(31日)
- ・6月ユーロ圏鉱工業生産(12日)
- ・7月米小売売上高(13日)
- ・7月日本通関ベース貿易収支(19日)

## 8月の見通し

ギリシャ離脱懸念が一旦後退した事で、市場の関心は米利上げ開始時期に集まっている。今月は米FOMCが開催されない事や、イエレンFRB議長が月末に予定されているジャクソンホール会合を欠席する事が伝えられている事などから、利上げ開始時期について直接的なヒントを与えそうなイベントが見当たらない。したがって、米7月雇用統計(7日)や米7小売売上高(13日)が米9月利上げ開始を示唆する結果となるか注目である。

テクニカル面では、先月は1.08ドルの底堅さを確認するも、その後の上伸は週足の一目均衡表の転換線(7月31日終了時点では1.11225ドル)に阻まれて失速した。良好な米経済指標が続いて1.08ドルを割るようだと、今年3月安値(1.04623ドル)~5月高値(1.14669ドル)の上げ幅76.4%押し(1.06994ドル)に向けた一段安の可能性はある。

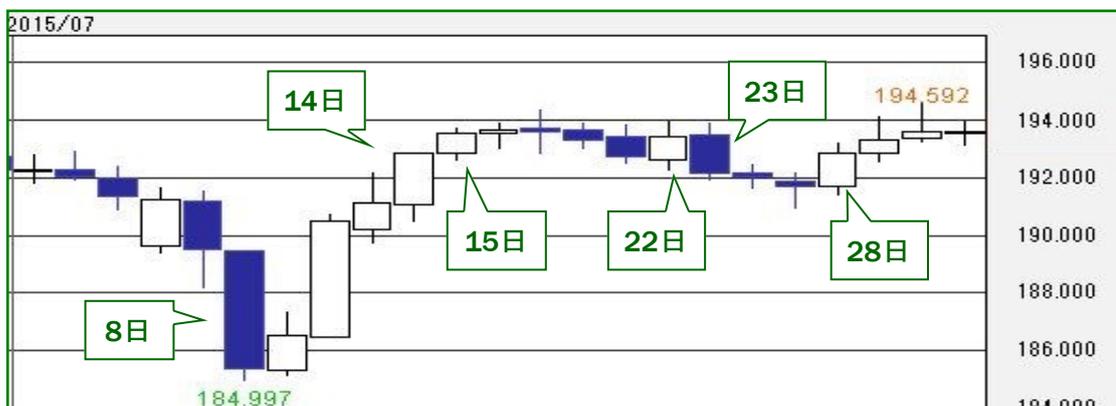
もっとも、ギリシャについては今回の対応で抜本的解決に繋がると見る向きは皆無である。これまで交渉が長引いた事により銀行を始めギリシャ経済が体力を失ったのみならず、国民投票前よりも厳しい緊縮案を受け入れた事でチプラス政権の弱体化が懸念されている事や、緊縮経済に疲れた国民が更なる緊縮策を受け入れられるかなど、依然としてギリシャが自立に向かう道筋は見えない。今後もギリシャ情勢不安がくすぶり続ける事となりそうだ。(川畑)

(予想レンジ: 1.07000~1.11500ドル)

## ポンド/円 7月の推移

# GBP/JPY

7月のポンド/円相場は184.997～194.592円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.7%の小幅な上昇(ポンド高・円安)となった。8日に一時184.997円まで下落するなど、上旬こそ軟調に推移したが、ギリシャを巡る懸念がひとまず後退した事や、中国株の下落もひとまず収まった事から間もなく反発。英中銀(BOE)の年内利上げ観測が浮上した事などが支援材料となり、17日には194円台を回復した。その後は、やや上値が抑えられる場面もあったが、下旬にかけて再び値を上げ、30日には194.592円の月間高値を付けた。ただ、6月に付けた約7年ぶり高値195.883円には届かなかった。



### 四本値

OPEN	192.291
HIGH	194.592
LOW	184.997
CLOSE	193.652

8日	中国上海総合株価指数が寄り付き直後に8%暴落するなど、アジア株安が進む中、リスク回避の円買いが活発化。その後も、米国株が下落したため円買いが加速。さらに、米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録の公表後にドル/円が下落した事も重石となり、184.997円の安値を付けた。
14日	BOEのカーニー総裁が、議会証言で「トレンドを上回る成長や国内コストの強まりの一部が海外から輸入されたディスインフレで相殺されているが、利上げ開始時期は近付いている」と述べた事を受けてポンド高が進んだ。
15日	英6月雇用統計は、失業率が予想通りの2.3%であったが、失業保険申請件数は予想(0.9万件減)に反して0.7万件増となった。また、利上げ開始時期の思惑に絡んで焦点となっていた3-5月週平均賃金が前年比+3.2%と予想(+3.3%)を下回った。これを受けて失望感からポンド売りが強まる場面もあったが、週平均賃金は2-4月の+2.7%から伸びが加速しており、利上げ期待を大きく後退させるには至らなかった。このため売りを巡ってはポンドが持ち直した。
22日	BOEのマイルズ金融政策委員会(MPC)委員が「年末に向かってインフレ率は目標水準に戻るだろう」「BOEは今後数年間に渡る利上げを開始する可能性」などと述べた事を受けてポンド高が進行。さらにその後、BOEのMPC議事録で「複数のメンバーがインフレリスクの上昇を指摘した」事が明らかになるとポンドが続伸した。しかし、政策金利の据え置きが全会一致(利上げ票がゼロ)であったため伸び悩んだ。
23日	日経新聞社が英フィナンシャル・タイムズグループ(FT)を8億4400万ポンド(約1600億円)で買収すると報じられたが、ポンド/円相場に特段の反応は見られなかった。その後、英6月小売売上高が前月比-0.2%と予想(+0.4%)外に減少した事からポンド売りが優勢となった。
28日	英4-6月期国内総生産(GDP)・速報値は、前期比+0.7%、前年比+2.6%と予想通りの結果であったが、ポンドは発表前に下落していた事から買い戻しが優勢となった。

## GBP/JPY

## 日経平均

OPEN	20291.05
HIGH	20850.00
LOW	19115.20
CLOSE	20585.24

## FTSE100

OPEN	6520.98
HIGH	6813.41
LOW	6430.36
CLOSE	6696.28

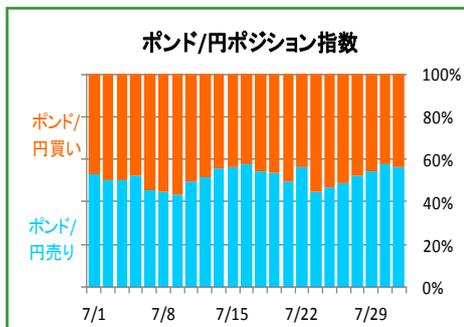
## 英2年債利回

OPEN	0.560%
HIGH	0.676%
LOW	0.461%
CLOSE	0.568%

## 英10年債利回

OPEN	2.034%
HIGH	2.177%
LOW	1.781%
CLOSE	1.882%

## 7月のポジション動向



## 8月の注目ポイント

## 月間指標カレンダー(外部リンク)

- ・7月英PMI製造業(3日)
- ・7月英PMI建設業(4日)
- ・7月英PMIサービス業(5日)
- ・BOE政策金利発表(6日)
- ・BOE四半期インフレレポート(6日)
- ・日銀金融政策決定会合(6-7日)
- ・7月英雇用統計(12日)
- ・4-6月期日本GDP・一次速報(17日)
- ・7月英消費者物価指数(18日)
- ・7月英小売売上高指数(20日)
- ・7月日本全国消費者物価指数(28日)
- ・4-6月期英GDP・改定値(28日)
- ・BOE要人発言

## 8月の見通し

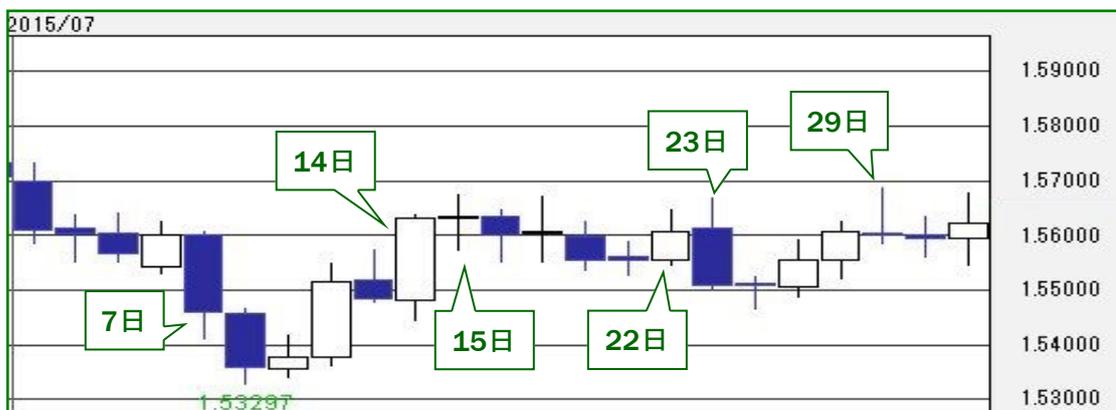
8月最大の注目イベントは6日の「スーパー・サーズデイ」だ。BOEは6日(日本時間20時)、MPC終了後に決定内容はもちろん、採決の内訳を含む議事録も即時公表する。さらに、インフレレポートで最新の経済見通しも同時に発表。また、その45分後にはカーニー総裁が記者会見を行う予定だ。これまで、金融政策決定に関する情報を小出しにしてきたBOEが、これだけの情報を同時に発信するという事で、市場はこの日を「スーパー・サーズデイ」と名付けて、その情報群に注目している。利上げを主張する委員の数(前はゼロ、今回は2人以上になる可能性があると考えられている)や、インフレ見通しなどから、年内の利上げ見通しが強まるようなら(現状では来年2月の利上げ見通しがスタンダード)ポンドは大きく上昇する可能性がある。一方で、「期待したほどタカ派的ではない」と市場が受け止めれば失望的なポンド安に振れる事になるだろう。いずれにしても、「スーパー・サーズデイ」への注目度が高いだけに、ポンド相場はその内容に敏感に反応する公算が大きい。その他、12日の英7月雇用統計や18日の英7月消費者物価指数も利上げ時期の思惑を左右すると見られ注目される。(神田)

(予想レンジ:189.500~197.500円)

## ポンド/ドル 7月の推移

# GBP/USD

7月のポンド/ドル相場は1.53297~1.57331ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.6%の小幅な下落(ポンド安・ドル高)となった。上旬は、ギリシャや中国の情勢不安からポンド安に振れたが、14日の議会証言でカーニー英中銀(BOE)総裁がタカ派色の強い発言を行った事を受けて英国の早期利上げが意識されて反発した。それでも、米国の9月利上げが意識される中でドルが強含んだ事から、月初の水準を回復する事なく1.56ドル台前半で取引を終えた。



### 四本値

OPEN	1.57010
HIGH	1.57331
LOW	1.53297
CLOSE	1.56226

7日	ギリシャ支援協議を巡る不透明感などから世界的に株価が下落する中、全般的にドル高が進んだ事がポンドの重石となった。NY市場終盤に、一部通信社が「ユーログループは11日にギリシャ向け短期支援計画について議論する可能性がある」と報じた事をきっかけにユーロは反発したが、ポンド/ドル相場ではユーロ/ポンドの上昇が重石となり続落した。
14日	カーニーBOE総裁が、議会証言で「トレンドを上回る成長や国内コストの強まりの一部が海外から輸入されたディスインフレで相殺されているが、利上げ開始時期は近付いている」と述べた事を受けてポンド高が進んだ。さらに、米6月小売売上高が前月比-0.3%と予想(+0.3%)に反して減少した事からドル売りが活発化すると、ポンド/ドルの上昇が加速した。
15日	英6月雇用統計は、失業率が予想通りの2.3%であったが、失業保険申請件数は予想(0.9万件減)に反して0.7万件増となった。また、利上げ開始時期の思惑に絡んで焦点となっていた3-5月週平均賃金が前年比+3.2%と予想(+3.3%)を下回った。これを受けて失望感からポンド売りが強まる場面もあったが、週平均賃金は2-4月の+2.7%から伸びが加速しており、利上げ期待を大きく後退させるには至らなかった。このため売り一巡後はポンドが持ち直した。
22日	BOEのマイルズ金融政策委員会(MPC)委員が「年末に向かってインフレ率は目標水準に戻るだろう」「BOEは今後数年間に渡る利上げを開始する可能性」などと述べた事を受けてポンド高が進行。さらにその後、MPC議事録で「複数のメンバーがインフレリスクの上昇を指摘した」事が明らかになるとポンドが続伸した。しかし、政策金利の据え置きが全会一致(利上げ票がゼロ)であったため伸び悩んだ。
23日	英6月小売売上高が前月比-0.2%と予想(+0.4%)外に減少していた事からポンド売りが優勢となった。また、米新規失業保険申請件数が25.5万件と約42年ぶりの低水準(好結果)となった事がポンド安・ドル高に拍車をかけた。
29日	英国の早期利上げ期待などを背景に1.5680ドル台まで上昇したが、米連邦公開市場委員会(FOMC)の声明発表を前に、米長期金利が上昇するとドル買いが優勢となり反落。FOMCが米労働情勢の判断を引上げた事から、ドル高が加速すると1.5600ドルを割り込んで下落した。

## GBP/USD

## NYダウ平均

OPEN	17638.12
HIGH	18137.12
LOW	17399.17
CLOSE	17689.86

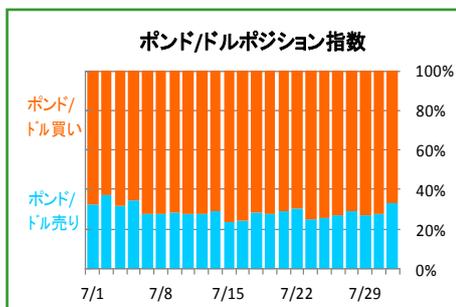
## 米10年債利回

OPEN	2.3315%
HIGH	2.4666%
LOW	2.1744%
CLOSE	2.1801%

## 英10年債利回

OPEN	2.034%
HIGH	2.177%
LOW	1.781%
CLOSE	1.882%

## 7月のポジション動向



## 8月の注目ポイント

## 月間指標カレンダー(外部リンク)

- ・7月英PMI製造業(3日)
- ・7月米ISM製造業景況指数(3日)
- ・7月米ISM非製造業景況指数(5日)
- ・BOE政策金利発表(6日)
- ・BOE四半期インフレレポート(6日)
- ・7月米雇用統計(7日)
- ・7月英雇用統計(12日)
- ・7月米小売売上高(13日)
- ・7月英消費者物価指数(18日)
- ・7月米住宅着工件数(18日)
- ・7月米消費者物価指数(19日)
- ・米FOMC議事録(19日)
- ・英4-6月期GDP改定値(28日)
- ・BOE要人発言

## 8月の見通し

8月のポンド/ドル相場は、複雑な値動きになりそうだ。英国では6日に「スーパー・サーズデイ」と呼ばれる一大金融政策イベントが行われる(スーパー・サーズデイについてはポンド/円の8月見通しを参照されたし)。市場は、少しでも多くの利上げ時期に関するヒントを得ようと血眼になる事だろう。一方、米国では金融政策会合は開催されないが、7月末の会合で9月利上げに含みを残しており、「利上げはデータ次第」というスタンスを維持した。このため、米7月雇用統計(7日)や米7月小売売上高(13日)などAクラスの経済指標は重要データとしていつも以上に注目を浴びる事になる。英国も米国も利上げを見据えている点と同じだが、英国の利上げは「新鮮味」というアドバンテージを持っていると思われるため、ポンドがやや優位にあると考える事ができるのかもしれない。もっとも、米国が9月に利上げを行うとの見方が強まれば、機先を制する事になるため、ドルの優位は揺らぎそうにない。日程的に、6日に英スーパー・サーズデイ、7日に米7月雇用統計と上旬に注目イベントが続く事も、ポンド/ドル相場の激しい値動きを予感させる。なお、英国については7月雇用統計(12日)や7月消費者物価指数(18日)の結果も、市場の利上げ期待に働きかける可能性が高い。同様に米国では7月消費者物価指数やFOMC議事録(いずれも19日)にも注目しておきたい。(神田)

(予想レンジ: 1.51500~1.59750ドル)